

## ワシントンが、そのニセ旗作戦を洗練させる

【訳者注】「ニセ旗 (false flag) 作戦」という概念なしには (米西戦争以来の) アメリカの世界制覇歴史は理解できず、そのパターン延長としての 9・11 以来の、今日の世界情勢も説明することはできない。にもかかわらず、メディアはそれを使わずに通そうとしている。ということは、我々を欺き通しているということである。staged (やらせ) という言い方もあるが、やはりこれが一番いいだろう。その定義は、本年 1/18 掲載のシャルリ・エブド事件に関する論文「“私は CIA だ”」の冒頭の約 4 行の定義が最上だろう。

中東のテロリストについても、CIA がすでに、これを自分たちの「資産」(assets) だと認めている——エボラ・ウィルス兵器と認識して、政府が特許を得ているように。にもかかわらず、メディアはそれをさえ隠して報道していない。

By Paul Craig Roberts

November 16, 2015, Information Clearing House



ワシントンとその従僕国フランスが、彼らのニセ旗作戦のやり方を洗練させた。シャルリ・エブド作戦によって、彼らは、物語を直ちに固定してしまえば、新聞やテレビからのどんな質問も避けられ、調査の代わりに決まったストーリーを用いれば済むことを知った。

セット・ストーリーを使えば、事件の調査に従事していた警察調査主任の一人の、不可解な“自殺”を説明する必要がなくなる。セット・ストーリーはまた、なぜ、犯人とされる者たちを逮捕するのではなく、殺す必要があったのか、あるいは、どうしてフランス官憲が、逃走した運転手については、あれほどヘマをやり、二人のガンマンについてはそうでなかったかを説明する。なぜ、官憲が逃走した運転手の存在を信じているのに、そんな運転手は逮捕も殺害もされていないのか、どんな説明もされていない。実際、代替インターネット・メディアを除いて、どんなメディアにも関心のない、答えのない質問がたくさんある。

アメリカとフランスが、インターネット上のシャルリ・エブド疑惑から学んだことは、ストーリーの流れをよくすることである。シャルリ・エブドには2つの暴力シーンがあり、その2つのテロ行為のつながりが曖昧だった。今度の場合は、数個の暴力シーンがあり、それらはストーリーの中で、よりよくつながっていた。

もっと重要なことは、このストーリーに引き続き、時を移さず、ドラマが次々と起こったことで、容疑者をベルギーまで追い詰めたこと、フランスのイスラム国への爆撃、フランスの中東への空母の派遣、仏大統領の ISIL (ISIS) への宣戦布告、それに、オランダがワシントンの圧力で NATO の第 5 条を指摘することで、NATO がイスラム国侵略へと引き込まれるだろうという憶測が起こった。ニュースが次々と新しいものにとって代わられることによって、大衆の注目は襲撃そのものと、それへの関心から引き離されている。すでに襲撃そのものは古い話になった。大衆の注意は脇へそらされている。NATO の地上戦はいつ始まるのだろうか？

西側メディアは、パリ襲撃の多くの興味ある側面を避けている。たとえば、CIA とフランス情報部の首脳たちは、パリ襲撃に先立つ数日前の会合で何を議論していたのか？ なぜ、ニセのパスポートが犯人を特定するのに使われたのか？ なぜこの襲撃が、多くの場所でのテロ攻撃の模擬演習と同じ日に起こり、最初の反応者たち、警官、緊急部隊、医療班がいたのか？ なぜフランス警察が、彼らの携帯データ追跡装置への高度なサイバー攻撃によって、目を眩まされたという報告を調査するメディアが、全くなかったのか？ ISIL にそれほど能力があると、本当に考える者があるだろうか？

西側メディアは単に、政府のプロパガンダの増幅器の役目をするだけである。西側以外のメディアでさえ、そのくすぐるような効果のために、このパターンに従っている。それはメディアにとって結構なストーリーで、努力を必要としない。

最初は、ロシアのメディアでさえ、西側の政治体制を、国内では政治的敗北から救い、シリアでは対ロシア敗北から救う、このセット・ストーリーを宣伝するのに努めていた。しかしロシアのメディアの一部が、ロシアのウクライナ“侵略”、アサドの化学兵器使用、アメリカの ABM がロシア国境に配備されているのは、ヨーロッパを、存在もしないイランの核 ICBM から守るため、等々の多くのウソ物語を思い出すのに、そう長くはかからなかった。

ロシアのメディアは質問し始め、Gearoid O Colmain から若干のよい答えを得た：

<https://youtu.be/L7GAbVhjTSw>

パリ襲撃を理解するためには、「ISIL とは何か？」という質問から始めなければならない。明らかに ISIL は、CIA、または CIA の作戦部門によって守られている、ある深層国家組織の創ったものである。ISIL は、リビアのカダフィを転覆するのに用いられ、その後、シリアのアサドを転覆するのに送られたと思われる。ISIL には、CIA やモサド、イギリスやフランスの情報部が、潜入しているものと考えられる。おそらく ISIL は、自分が独立した国家で、ワシントンのアジェンダから自分自身のアジェンダに切り替えつつあると考えているだろう。しかし ISIL は相変わらず、少なくとも部分的には、ワシントンからの能動的・受動的な支援に依存していると思われる。

ISIL は突然出現した新しい集団である。ISIL は、中世から現れた、野蛮な、ナイフを振り回す狂信集団のように描かれる。そのようなグループがどのようにして、これほど広範囲な地球的な能力を、これほど急速に獲得し、ロシアの旅客機をエジプト上空で爆破させ、レバノンやトルコで砲弾攻撃を行い、フランスの情報部を出し抜き、パリで同時多数攻撃を成功させるほどの能力を持つにいたったのか？ ISIL がイスラエルを決して攻撃しないのは、どうしたわけか？

第二の質問は、「パリ襲撃がどうして ISIL を利するのか？」ということである。ヨーロッパの国境を閉鎖して、難民としてヨーロッパに潜入する ISIL の能力を殺ぐのが、ISIL の利益になるのか？ 中東の ISIL 拠点を爆撃するようにフランスを挑発し、自ら NATO の侵略を招くことが ISIL の得になるのか？

誰の利益になるのか？ 明らかに多くの点で、ヨーロッパやアメリカの政治体制の利益になるだろう。仏、独、英の体制派政党が悩んでいるのは、難民の洪水をヨーロッパに引き入れつつあるワシントンの中東戦争を、彼らが可能にしたからである。欧州のイスラム化に反対する Pegida がドイツで起こり、Farage の独立党がイギリスで、Marine Le Pen の「ナショナル・フロント」がフランスで起こっている。実際、最近の世論調査では、ル・ペンが次期仏大統領としてリードしている。

パリ襲撃は、その問題を利用して、これら反体制の政治政党から離れる方向へ導こうとしている。この襲撃に反応してフランス大統領の口から出た第一声は、フランス国境を閉鎖するという宣言だった。すでに、メルケルのドイツにおける政治的盟友は、彼女の政府をその方向に押しやろうとしている。「パリがすべてを変える」と彼らは宣言している。それは確かに、ヨーロッパの政治体制を救い、敗北と無力感から脱出させるものだった。

同じ結果がアメリカでも生じた。ドナルド・トランプとバーニー・サンダースなど、アウト

サイダーたちは、体制派の大統領候補をやっつけていた。トランプとサンダーズは勢いがあった。しかし「パリがすべてを変えて」しまった。この二人は今ニュースから干されている。弾みが失われた。ストーリーが変わった。「パリ襲撃は2016年選挙の争点になる」とCNNは宣言している。<http://www.cnn.com/2015/11/16/politics/paris-attacks-isis-2016-reaction/index.html>

仏大統領の初めの言葉の中には、これを証明するものは何もないのだが、イスラム国はフランス国民を襲った、という宣言もあった。明らかにこれは、オランダがNATOの第5条に訴え、NATOが侵略軍をシリアに送ることを狙っている。これは、アサド政権をイスラム国による敗北から救ったロシアのイニシヤティブに反対する、ワシントンのやり方だと思われる。NATOの侵略は、イスラム国に対する戦争の一部として、アサド転覆を狙うであろう。

ロシア政府は、すぐにはこの脅しに気づかなかった。ロシア政府は、パリ襲撃を、ISILへの戦いにおける西側の協力を得る機会と見た。ロシアの路線はずっと、ISILに対しては協力して戦わねばならないというものだった。ロシアのプレゼンスは、大いに効果的ではあるが、シリアでは小さいものだ。シリアにおけるその政策がNATOの侵略に押しつけられたとき、ロシア政府はどうするであろうか？

パリ襲撃の唯一の受益者は、西側の政治体制とワシントンのアサド転覆計画である。パリ襲撃は、仏、独、英の政治体制に対する、ナショナル・フロントやPegidaや英独立党の脅威を取り除いてしまった。それは米政治体制へのトランプやサンダーズの脅威を取り除き、ワシントンのアサドを権力から退ける目標に弾みをつけた。

ローマ人のよく使った *cui bono*（誰のためになるか？）への答えは明らかである。

しかし、それを西側メディアから聞くことを期待してはいけない。

（ポール・クレイグ・ロバーツ博士は、かつてレーガン大統領の閣僚（経済政策担当財務次官補）として米政府の中枢にいた。レーガンとともにロシア（ソ連）との関係改善を進めたが、後の諸政権がすべてをぶち壊したと彼は述懐している。「ウォールストリート・ジャーナル」共同編集長、「ビジネス・ウィーク」「スクリップス・ハワード・ニュースサービス」および「クリエイターズ・シンジケート」のコラムニスト。多くの大学から講義を依頼され、彼のインターネット・コラムは世界的にファンを引き付けている。最近著として、*The Failure of Laissez Faire Capitalism and Economic Dissolution of the West*, および *How America Was Lost* がある。）